



野口雨情は 昭和10年秋、数回に亘り来訪して、白滝にちなんだ10句を詠んだ。その句に曲をつけ、当時の賑わう街中に「白滝小唄」が流れていた。



「白滝小唄」 作詞：野口雨情 作曲：不詳



春の白滝桜の眺め 松の陰から花が咲く  
 夏の白滝青葉の頃は ほととぎすさえ鳴いてくる  
 秋の白滝木と木の紅葉 山に錦の幕を張る  
 冬の白滝降る白雪は 積もりや枯木も花となる  
 雄滝雌滝と別れておれど 末は一つの川となる  
 入りの風吹きや白帆で帰る ここは白滝柴河原  
 山にひびいて伊予白滝の 落ちる水さへ花と咲く  
 鮎は浅瀬に蛸は草に 柴の河原の川岸に  
 伊予の白滝鯉なら新家 見せてやりたい日本一  
 小野の延命お地藏さまに 命のばしの願かける

白滝小唄 野口雨情



不動滝 (龍王ノ滝)

上滝 高さ20m 幅5m  
 中滝 高さ7m 幅5m  
 下滝 高さ11m 幅5m

・高さ、中と迫力があり白滝公園とは別な景観です。



【お問い合わせ先】  
 大洲市観光協会長浜支部 ☎(0893) 52-1111  
 大洲市白滝公民館 ☎(0893) 54-0301  
 白滝商工観光連盟



秋の白滝木と木の紅葉  
 山に錦の幕を張る



るり姫まつり

滝の紅葉が完全に色づく頃になると、紅葉と滝で知られる白滝公園で、11月の第3日曜日に「滝まつり」が、また、23日の勤労感謝の日には、伝統行事「るり姫まつり」が行われ、稚児行列、花みこし等が華やかに繰り出されて、晩秋の紅葉狩りを盛り上げる。

この「るり姫まつり」は、緋のはかまに色とりどりの衣装で着飾った約20人の少女の扮する「るり姫」たちが、秋日にキラキラ揺らぐ金の冠をかぶり、11人の男児の担う花みこしと共に紅葉をくぐって、公園内の渓谷沿いの山道を練り、雌滝の落ち口にある「るり姫塚」まで登る。ここでるり姫供養が行われ、60メートル下の滝壺に花みこしを投げ込んで、「るり姫」の霊を慰めるものである。



るり姫塚

今をさかのぼること約400年前、米津城(滝之城)を土佐の長宗我部勢が再度侵攻したとき、奮戦むなしく城主は討ち死にし、ついに落城した。城主の奥方「瑠璃の方」は、長刀の達人。特に吹き針は神技に達し、娘の八重姫、九重姫姉妹も手裏剣の名手であった。

これに従う女たちも長刀の使い手ぞろい、いずれも白ハチマキにタスキ姿の決死の意気もすこく、群がる敵の囲みを突いて出た。姫君2人は、手練の手裏剣300余本を矢継ぎ早に飛ばし、奥方の目にも止まらぬ吹き針の神技に、敵兵はつきつぎに傷つき倒れた。

奥方一行はついに重圍を脱したが、このとき針を運んでいた侍女の1人が不意に大声で、「奥方様吹き針もこれでおしまいです」と叫んだ。これを受けて浮き足立っていた敵は再び盛り返し、奥方一行を包囲した。

奥方は、2歳の世継ぎ「尊雄丸」を自ら脇に抱え、「米津、滝之城の一族と知れば一大事」と侍女たちを励まし、ようやく血路を開いて、現在の子供の国広場がある白滝公園の洗場滝口に辿り着いた。そこで2人の姫を側近く招き寄せ「姉妹は後に生き残りて、私の霊を慰め、冥福を祈れがし、世に悩める婦人病を治し、子無き婦人には子宝を授け得させん」と叫びつつ、「尊雄丸」を抱き60メートル下の滝壺に飛び込んだ。残る侍女たちも続いて滝に飛び込んで水死した。

今、この滝壺を「女郎が淵」と称えている。一説には、城主も同じく抜き身の刀をくわえて滝壺に飛び込んで果てたとも伝えられる。

奥方が身を投じたという雌滝の落ち口にあるるり姫塚には、「るり姫親子観音」が祀られている。奥方が姫というのはおかしいが、ふところに赤子を抱いた「るり姫観音」は誠に美しい。この観音は、白山権現と共に郷土民の厚い崇敬を集めている。